やすらぎ通信

お盆号

渋沢栄一の慈悲心

大河ドラマで「青天を衝け」が放映されています。日本近代資本主義の父と言われる渋沢栄一翁のことです。今後、一万円札になることが決まっています。連休中はお寺への訪問者も少なく、著作である「論語と算盤」を読み感動しました。

名だたる会社、大学、病院、鉄道等、四八〇もの会社の設立に関わり、六百もの慈善事業にも貢献しました。近代の歴史を習わなかったからでしょうか。こんなに日本のために尽力したのもかかわらず名前が取りざたされませんでした。ノーベル賞に二度候補として選ばれていたことも知りませんでした。

ここに、翁の人となりがわかる話があります。三菱の創始者、岩崎弥太郎と面談した時、「二人でこの日本をうまくやろうじゃないか。」と持ち掛けられたが、「あなたは自分の会社の発展のみ考えている利己主義者であり、私はその話にのることはできません」と、破談になった話があります。

意外に知られていない事に、明治初頭より亡くなるまでずっと深く関わっていたのが東京養育院という施設です。初めは路上生活者を住まわせた施設でしたが、私財をなげうち、職員に「子供の親になってほしい」と心の発達にも配慮したそうです。亡くなる時は全ての権利を放棄し、日本のために一生を捧げつくした大恩人です。

豪農の息子に生まれた栄一は士農工商の身分制度の中、農民の位ではどんな理由があろうと武士には背けない理不尽さを常に思い、討幕の世上の中、縁あって徳川慶喜の膝下に入り、パリ万博に列席し、西洋を視察する機会を得ることができました。

そこで見た世界に愕然とし、日本の力のなさを肌身に感じ、政治より実業家の世界に力を尽くすことを決意します。帰国したときは、攘夷がなされ、幕府は解散していました。一時、蟄居した慶喜のもと静岡にいましたが、西洋事情に明るい栄一の意見を聞きたい政府の要望により、次々と産業の革新を計っていったのです。論語は正に武士道の心であり、算盤は車にすればエンジンであり、経済の事です。両者が共に必要で、片方だと片手落ちで前に進みません。

今日渋沢翁が生きていたら何を日本に望むでしょうか。「志を高く持ち、自己の計らいを捨て、皆お互い助け合い、世のため人のため尽くせ」と天より声が聞こえるようです。

コロナ禍ですがあきらめず乗り切っていきましょう。心から各家の疫病退散を祈念致します。

三明寺住職　大嶽正泰　合掌

修行中の三男と　昨年12月 永平寺に寄る機会がありました。
修行中の随筆が冊子に掲載されたのでご覧ください

釈尊誕生仏
御詠歌の皆さんに折っていただいた蓮の折り紙を飾りました

【檀信徒行事】

六月

○草薙家・長妻家ご法事　5日
○河野家・青山家・木下家ご法事　6日
○足立家ご法事　13日
○地蔵講　15日
○松坂家・斉藤家ご法事　19日
○荻津家・古屋家ご法事　26日
○川村家・邑田家ご法事　27日

七月

○水野家ご法事　2日
○佐藤家ご法事　3日
○檀信徒施食会　4日
○道了講　6日
○檀信徒.ペット新盆供養　11日
○お棚経　12～15日
○盆供養　12・13・14日
○地蔵講　20日
○木下家ご法事　25日
○村松家ご法事　31日

八月

○道了講　3日
○渡辺家ご法事　7日
○石野家ご法事　8日
○お棚経　1・2・13・14日
○盆供養
○地蔵講　13・14日　17日

【三明寺やすらぎ大学】

○土曜写経会　読経・法話・写経　6時
○日曜坐禅　坐禅・提唱・喫茶　6時
○月例坐禅会　第一月曜日　19時30分
○月例写経会　第三月曜日　10時
○御詠歌　第一・三火曜日　10時30分
○やすらぎ大学　休講
○長泉町くすのき学級特別講話　8月6日

酒かす地蔵菩薩祭と施食会について
―お塔婆供養―

今年の三明寺祭典も、新型コロナウイルス感染予防を考慮し、屋外での祭典行事は行いませんが、本堂内での施食会先祖供養はお勤めします。ご先祖様のお塔婆供養を致しましょう。参拝には各自の対応とご協力をお願いします。

【お知らせ】

□住職ラジオ法話
SBSラジオ　第4土曜日12時22分
コーストFM　76.7　月曜～金曜7時30分

【編集後記】

ワクチン接種の充実が期待されます。五輪の開催も不安ではありますが、選手の活躍に明るい話題が増えることをのぞみます。S

お盆飾りの馬と牛、東日本の習慣の様です。境界はわかりませんが、四国九州の友達は知らなかったと、姪からききました。H

令和三年六月一日　第七十九号
発行（宗）曹洞宗　愛鷹山　三明寺
編集　大嶽　正泰
住所　沼津市大岡三明寺四〇五一
電話　〇五五・九二九・二三二三
ＦＡＸ　〇五五・九二九・二三二四
ＵＲＬ　http://www.sanmyouji.com
メール　info@sanmyouji.com

「経験」

大嶽　雄泰

一月に降り積もった雪も今はだいぶ溶け、春の訪れを感じるようになりました。永平寺はこの時期、出会いと別れの時期であり、修行に区切りを付けて送行する雲水や永平寺での修行を志した者が、それぞれ山門に立ちます。私も昨年この時期に山門に立ってから一年が経とうとしていますが、振り返るとあっという間の日々だったように感じます。特に、上山したばかりの頃は右も左も分からず、一日を乗り越えることで精一杯でした。毎日多くのご注意ご指導を頂くため、頭の中で整理が追い付かず、何が正しくて何が間違っていたのかもよく分からなくなっていました。きっと今の一年目の修行僧の中にも当時の自分と同じような気持ちを抱いている者がいるのではないかと思います。

私は上山してすぐにある壁にぶつかりました。それは叢林が集団生活を基本とするということにです。今までしてこなかった集団生活。私はお寺とは関係のない大学へ行き、自分がやりたかったことを学び、仏教とは無縁の生活をしていたため、よく無知から集団の和を乱しては古参和尚さんにご注意を頂きました。また、決められた時間に起きて、決められた時間に食事をし、決められた時間に寝る。そのような睡魔と空腹に耐える生活にも慣れておらず、辛い、面倒だ、何でこんな事をするのか、といったネガティブな気持ちが沸いてきては、顔や態度に出てしまっていました。もちろんその度にご指導を頂き、挫けそうになることも多かったです。しかし、そのような時はいつも同安居という存在に助けられてきました。育ちも年齢も違う、永平寺で修行したいという気持ちだけで一緒になった仲間。同じ釜の飯を頂き、時に励まし合い、時に些細な事で言い争ったりもしましたが、慣れない修行生活で一緒に頑張っている仲間がいると思えたため、今まで安居を続けることができました。

「大衆一如」、この言葉はたくさんの修行僧が一体となり、共に同じことをするという意味です。私は上山したばかりの頃、この言葉がまるで自分を縛りつけてくるようでとても窮屈に感じていました。しかし、修行して分かったことは、この一如とはただの馴れ合いではなく、人それぞれに違いがある中で自分の得意なことは率先して動き、周りを助け、苦手な事は教えてもらいながら励む。こうして支え合いながら一体となり共に同じように修行するということでした。

誰もが周りを思って修行しています。それは同安居同志だけでなく、古参和尚さんが暫到和尚に対しても同じでした。私は上山したばかりの頃は、納得いかなかった事、理不尽だと感じていた古参和尚さんからのご注意が数多くありました。しかし、自分が同じ立場になって分かったことは、あの時古参和尚は、私達の事をきちんと見て、注意してくれていたということでした。

私は吉祥閣布教係という寮舎で古参和尚さんに言われた一言が、今でも強く印象に残っています。それは「暫到への厳しい指導は端から見たら可哀想かと思うかもしれない。だけど、その人がお坊さんとして教える立場に立った時に困らないよう、古参は細かいところまで心を鬼にして指導しなければならない。厳しい状況の中、仲間と協力し必死に絞りだした智慧や培った経験は必ずその人の人生の糧となる。甘やかされた暫到時代を経験し安居を終える方がよっぽど可哀想なのだ。」といった言葉でした。その頃の私は、もう少し優しく丁寧に教えてくれてもいいのではと不満に感じていましたが、今の暫到和尚さんを指導しようと思う時、あの時の古参和尚さん気持ちが少し分かるようになりました。

私は一年間の修行を通して、修行は決して自分一人で行えるものではないことを知りました。仲間との支え合いの積み重ねが仲間との絆を育み、私たちに多くの気付きを与えてくれるという事を強く感じました。永平寺では時に厳しく、今までの生活との違いに戸惑う事もありますが、ここでしか味わえない経験も多くあります。まだここで一年修行しただけですが、自分が一年で培った永平寺での経験を生かして、去年私たちに根気強くご指導して頂いた古参和尚さん方のように、周りを思って時に厳しく、時に優しく、大衆一如を胸に行じていきたいです。

（静岡県沼津市　三明寺徒弟　三男
副行兼端雲閣接頭　令和二年上山）

大本山永平寺月刊誌「傘松」に掲載

春彼岸会　3/20　先祖供養とペット供養　密を避けるよう分かれてお出かけいただきました

宗清寺にて法要　3/23　両親の 17 回忌法要を営みました。父親は 100 才 母親は 97 才、長寿でした

得度式　4/20　福島の永沼政次氏が仏門に入るための得度式をおこないました

宗務所婦人会総会・研修会　4/14　井出の大泉寺 小島健布老師に 講話をいただきました